

能 頼 政

宇治平等院の境内に残る扇形の芝は、源三位（げんさんみ）と称された源頼政が、扇を敷いて自害した場所だった。以仁王を奉じて平家討伐の兵を挙げたが、奮闘のむなしく敗れ、ここで自らを花の咲かぬ埋もれ木にたとえた辞世の歌を詠んだのだ。旅の僧の枕辺に、武装した出家姿の頼政の亡霊が現れて、合戦のありさまと老武者の無念を語る。

生まれるのが早すぎた男、源頼政の栄光と挫折の生涯が、宇治川の初夏の味わい深い風景とともに描かれる。



世阿弥が応永年間の自信作として『三道』に挙げながら上演が絶え、江戸時代に復活された。近年、古い形の上演も試みられている。

能 班 女

美濃国野上の宿の遊女花子（はなご）は、都から来た吉田少将と契りの証に交換した扇ばかり眺め暮している。宿を追放されてしまふ。人々は、漢の帝の寵愛を失ったわが身を秋の扇にたとえた班婕妤（はんしやうよ）の故事から、花子のことを班女と呼んだ。やがて、都、下賀茂の糺（ただす）の森に、せつない恋心を語り舞う物狂いの姿があった。純粋で一途な恋が、紆余曲折を経て成就する物語を扇をキーワードにして朗詠や早歌を

能 融

ちりばめながら濃やかに描いた名曲

中秋（旧暦八月十五日）、都に着いた旅の僧が六条河原院を訪れる。ここは、昔、源融の左大臣が贅を尽くした邸宅の跡だったが、陸奥の塩竈（しおがま）の風景を模して塩を焼かせたという広大な庭も、今は見る影もなく荒廃していた。ところが、東山から昇った十五夜の月が中天にさしかかる頃、往時の河原院が甦り、融の霊が在りし日の姿で現れる。

源融はその境遇から光源氏のモデルの一人とされる。冴えわたる月の光の中、狂おしく舞う貴公子の姿に漂う究極のダンディズム。

能 井 筒

昔、幼い二人は、井戸の傍らで互いの姿を水に映して心を通わせた。大人になり、幼い恋は成就して二人は夫婦になったが、やがて男には山一つ向こうに通う所ができた。中秋の在原寺に現れた女が、月光の下で語る恋の記憶。「井筒の女」、またの名を「人待つ女」と呼ばれた女の魂は、恋の絶頂を実感できた場所に漂いつづける。

世阿弥の完成させた夢幻能の決定版であり、『申楽談儀』で自讃するほど傑作だ。時代を越えて人気曲でありつづける永遠の恋の能。



文・石淵文恵

各公演2カ月前の同日付よりチケット販売開始

- 入場券のご案内 ——
- 7月13日 自由席

前売	当日
一般 2,100円	一般 2,300円
学生 1,000円	学生 1,200円
 - 7月27日以降 自由席（座席指定可）

前売	当日
一般 4,200円	一般 4,200円
学生 2,600円	学生 2,600円
- 自由席に500円追加で座席指定可能（要予約）

—— 前売券について ——

お電話もしくはご来店にてご購入いただけます。お電話でお申し込みの場合は、郵送させていただきます（送料400円・郵便局の振込用紙を同送）。また、大槻能楽堂ホームページ、ローソンチケット、チケットぴあでもお求めいただけます。

	ローソンチケット (Lコード)	チケットぴあ (Pコード)
7月13日	51704	429-305
7月27日	51705	429-306
8月31日	51713	429-307
9月21日	51715	429-308
12月8日	51722	429-309
2月8日	51724	429-310

★全6回割引券▶20,000円★

初めにお申し込みいただいたお席にて、ご覧いただけます。詳細は大槻能楽堂事務局までお気軽にお問い合わせください。

※一部公演のお席を振り替えさせていただく場合がございます。

※駐車場はございません。公共の交通機関をご利用ください。

※公演中は携帯電話の電源はお切りください。

※やむを得ぬ事情により、曲目・出演者・日程等の変更が生じる場合がございます。あらかじめご了承くださいませ、お願い申し上げます。

本公演における写真撮影・テープ録音・携帯電話等にての撮影・録音は著作権・肖像権に抵触しますので遠慮いただきますようお願いいたします。

Unauthorized recording or photography of the performances is prohibited and a violation of copyright. (Thank you for understanding and we hope you will have a good time.)

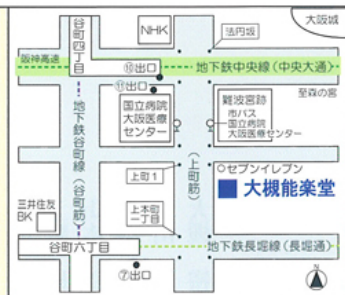
- ◎主催：公益財団法人大槻能楽堂
- ◎後援：大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会・公益財団法人関西・大阪21世紀協会

会場 大槻能楽堂

大阪市中央区上町A番7号

- 地下鉄「谷町四丁目」駅下車、⑩番出口を出て南へ約300m。
⑩番出口にエレベーター有）
または「谷町六丁目」駅下車、⑦番出口を出て約350m
⑦番出口にエレベーター有）。
- 市バス「国立病院大阪医療センター」下車南へすぐ。

※大阪駅前から62系統「住吉車庫」行き、天王寺から62系統「大阪駅前」行き。



世阿弥生誕 六百五十年記念

二〇一三年度

大槻能楽堂自主公演 能の魅力を探るシリーズ



世阿弥を学び、ZEMMIに学ぶ

特別企画

第五十四回

七月十三日(土)

午後三時始

基調講演

「能」に期待する

講師

鈴木 忠志

独吟 足引山

謡

大槻 文藏

仕舞 玉水

舞

観世鏡之丞

地謡

大槻 文藏

赤松 禎英

上野 雄三

武富 康之

足引山は世阿弥作の謡物で、玉水は世阿弥作の可能性がある能です。現在はいずれも廃曲となっています。

トーク

世阿弥にどう向き合うか

鈴木 忠志

天野 文雄

観世鏡之丞

大槻 文藏

終演予定五時頃
年間番組にて講師を山崎正和氏とご案内しておりましたが、ご都合により、ご出演不可能となりました。鈴木忠志氏にご出演いただきこととなりました。

いまやZEMMIで世界に通じるようになった世阿弥ですが、その知名度に比べると、彼がどのような生涯を送り、どのような環境で活動し、どのような作品を作り、芸道をとおしてどのような思想に到達していたか、また、彼が能楽以外の分野でどのように評価されているかについては、かならずしも十分に解明されていません。世阿弥が貞治二年(一三六三)の生れだという通説にしても、翌貞治三年の可能性があり、没年や享年になるとさらに漠然としています。

す。晩年に流された佐渡からは帰洛できたのかも不明です。世阿弥の能や芸論の芸術的、思想的な価値についても、解明されていないことは少なくありません。そこで、このシリーズでは、通説に従えば生誕六五〇年になるこの年にあたって、世阿弥について何がどこまで明らかになっているかを考えてみることにしました。同時に、それは「世阿弥に学ぶ」ということにもなるはずですよ。(天野文雄)



天野文雄

あまのふみお

大阪大学名誉教授、文化庁関西元氣文化圏推進連携支援室長、国学院大学文学院文学研究科教授。能の歴史や資料、能面の研究に加え、中世・近世の日本芸能史も研究。著書に『翁猿楽研究』、『世阿弥がいた場所』、『能死道通(上・中・下)』等。第十六回観世寿夫記念法政大学能楽賞、第四十回日本演劇学会河竹賞等受賞。現在、日本演劇学会会長。

松岡心平

まつおかしんぺい

東京大学大学院総合文化研究科教授。世阿弥および能を中心とする日本の中世芸能・中世文学を専門とし、『宴の身体パサラから世阿弥へ』、『中世芸能を読む』等、関連著書多数。全四巻の『能を読む』シリーズの編集委員。財団法人観世文庫の理事も務める。

大谷節子

おおたにせつこ

神戸女子大学文学部教授。世阿弥が「能」という文学をいかに確立したか、という視点で書かれた『世阿弥の中世』はじめ、『張良』、『巻書伝授譚』考、謡曲『鞍馬天狗』の背景、『素謡の場』京観世林喜右衛門と田・月漢』など、能に関する著書・論文を発表。

田中貴子

たなかたかこ

国文学者、池坊短期大学国文科専任講師。梅花女子大学文学部助教授、京都精華大学文学部助教授などを経て、二〇〇五年より甲南大学文学部教授。専門は鎌倉時代から南北朝時代の仏書や神書にみえる説話の研究。近著に『中世幻妖 近代人が憧れた時代』。

講演

「能」に期待する

講師

鈴木 忠志

天野 文雄

観世鏡之丞

大槻 文藏

赤松 禎英

上野 雄三

武富 康之

第五十五回 二〇一四年

七月二十七日(土)

午後二時始

世阿弥、その生涯

お話

宮本 圭造

田中 貴子

「賴政」をめぐるって

対談

宮本 圭造

田中 貴子

前シテ 尉

後シテ 源三位頼政の霊

ワキ 旅僧

アイ 里人

福王 茂十郎

小笠原 匡

貞光 義明

荒木 賀光

河村総一郎

赤松 禎英

武富 康之

後見

大槻 文藏

齊藤 信隆

上野 雄三

山本 正人

生一 知哉

大槻 裕一

山田 薫

地謡

第五十七回

八月三十一日(土)

午後二時始

世阿弥、その作品と芸風

お話

松岡 心平

田中 貴子

「恋重荷」をめぐるって

対談

松岡 心平

田中 貴子

前シテ 山科莊司

後シテ 莊司の七霊

ツレ 女御

ワキ 臣下

アイ 下人

齊藤 信隆

久田舜一郎

野口傳之輔

辻 芳昭

三島元太郎

上野 朝義

上田 拓司

生一 知哉

大槻 文藏

赤松 禎英

上野 雄三

山本 博通

山本 正人

藤谷 音彌

武富 康之

水田 雄昭

地謡

第五十八回

九月二十一日(土)

午後二時始

世阿弥、その理論

お話

渡邊 守章

田中 貴子

「班女」をめぐるって

対談

渡邊 守章

田中 貴子

前シテ 花子

後シテ 前問人

ワキ 吉田少将

ワキツレ 従者

アイ 野上宿の長

浅井 文義

福王 知登

是川 正彦

中村 宣成

茂山千三郎

光田 洋一

荒木 賀光

守家 由訓

赤松 禎英

武富 康之

後見

大槻 文藏

齊藤 信隆

上野 雄三

山本 正人

長山 耕三

水田 雄昭

山田 薫

地謡

第五十九回

十二月八日(日)

午後二時始

世阿弥、その先達と後継者

お話

大谷 節子

田中 貴子

「融」をめぐるって

対談

大谷 節子

田中 貴子

前シテ 尉

後シテ 融大田の霊

ワキ 旅僧

アイ 所の者

大日方 寛

善竹 隆平

杉 信太郎

荒木 建作

河村真之介

前川 光範

山本 博通

梅若 猶義

後見

大槻 文藏

齊藤 信隆

赤松 禎英

上野 雄三

山本 正人

生一 知哉

寺澤 幸祐

齊藤 信輔

地謡

第六十回

二月八日(土)

午後二時始

世阿弥、その環境

お話

天野 文雄

田中 貴子

「井筒」をめぐるって

対談

天野 文雄

田中 貴子

前シテ 里女

後シテ 有常の娘

ワキ 旅僧

アイ 里人

福王 茂十郎

善竹 隆平

杉 市和

飯田 清一

谷口 正壽

赤松 禎英

武富 康之

後見

大槻 文藏

齊藤 信隆

上野 雄三

山本 正人

寺澤 幸祐

長山 耕三

大槻 裕一

地謡